三日月が見下す夜に

栞音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三日月が見下す夜に

【Ｎコード】
Ｎ３６２２Ｙ

【作者名】
栞音

【あらすじ】
無頓着に生きれば苦しまずに済む。身内が死んだところで僕の人生に影響はない。そう思っていたのに。高所恐怖症だった姉が転落死。事故か自殺か他殺か偶然か。真実を探し求めようとする自分に動揺する。学校に忍び込み、鍵を手に入れ、”自殺禁止”の張り紙が張られた錆びついてる屋上のドアを開けた。そこで、出会う。真実の鍵を握る少女に。名前を消された指定ジャージを着ている少女に。「その女が人間でも生物でも幽霊でも現実でなくとも、もし、もしまた会えたら、話せたとしたら…あんたは素直に前を向いて歩

けるの？孤独な世界で偽者の夜空を眺めて綺麗だと言えるの？」

＊1

落下。自分の意思で落ちたのか他人の思惑で落とされたのか。
死人に口ナシ。彼女は何も語らない。死体は何も語れない。
白い布を被った姉はどんなに待っても動かなくて。体は
傷や痣だらけで白く美しい肌が不気味に感じられる。
表情筋は強張り、固まり、美人だった面影はない。
父は怒鳴る。母は喚く。妹は泣く。僕は見つめた。
冷たくなった姉を。脈もない手をぎゅっと掴んで。
検視によれば主な死因は転落死で間違いないらしい。
草花のお陰で地面に直撃は避けたらしく骨は数本折れた
だけだったとも医者に聞いた。ならば、なぜ姉は死んだのか。
高所恐怖症だった姉が、どうして転落死に屋上を選択したのか。
分からない。僕は姉の何を見てきたんだ。考えても分からなかった。
物事に無頓着な僕が、死にたくないから生きているだけの無意義な
僕が

姉の死を悔やんでいる。事故だろうが自殺だろうが他殺だろうが関係ない。

身内が死んだところで僕の人生に影響はない。そう思っていたのに。

真実を探し求めている自分に動揺する。アイデンティティが

崩れていく。造り上げた道が歪んでいく。侵されていく。

どんなに、頑張って努力したって過去に戻れなくとも

姉が最期に残した言葉の真意を僕は知らなきゃいけない。

＊2

足を震わせ、階段を1段1段と躊躇うように上る。

生徒会に所属する友人Aに借りた屋上の鍵を握り締めて。

ドアに張られた紙には立入禁止ではなく『自殺禁止』の文字。

行書で達筆に書かれている文字の上手さがなんとなく腹立だしい。

誰だ、こんなものを書いたのは。姉は自殺する愚かな人間ではない。

父に似たのか、自分の信念や正義を簡単に曲げられる人ではなかった。

屋上のフェンス前に3年生指定の赤いラインが入った姉の上靴が発見され、

自室の机の中には遺書のような手紙が残されていたので、警察も学校側も

飛び降り自殺だと判断した。理由は学力。首席を維持していた姉の成績が

落ち、奨学金制度の対象から外されたことがショックだったのだろうと

推測されて。学校で自殺だなんて傍迷惑な。責任者はその程度の

認識だっただろう。不運。それが大人の捉え方。起きたものは
仕方がない。今後は、どう事件を対処し、世間に対応するか。
世間をなるだけ騒がせず、評判を落とさず、有耶無耶にして。
ニュースで文字だけが流れ、新聞で小さな記事に取り上げられ、
波風立てずに穏便に、姉のメンタルの弱さが原因だったと言われた。
悔しかった。そんな馬鹿な話があるか。ビジネスマンの父のお陰で
僕らは
金銭類に関して不自由なく生きてこれたんだ。学費に困るなんて有
り得ない。
奨学金は付属品にしか過ぎなかった。そして、プライドの高い女で
もなかった。
追い抜かされた人間に見下されても皮肉めいたことを言われても姉
ならば
馬鹿正直に相手を褒めるだろう。本心で。嫌味などの感情は含まず
に。
世界を愛す世間知らずな姉だったが、人を気遣う心と常識は持って
いた。
見知らぬ人でも困っていたら声をかけ、自分まで一緒に悩んでしま
う人だ。

どんな人間も綺麗な心を持っている。それでも、悪い人がこの世にいるのは

可哀想な境遇で生まれ、人間としてよろしくない環境の所為だと信じてたんだ。

僕は姉がいつか宗教勧誘に惑わされるのではないか？と心配するフリをしていたが

それは無駄に終わったワケで、どうでもよいだろう。もう、姉はいないのだから。

誰かの為なら自分の才能が利用されることを光栄だと偽りなく言えてしまう

姉が苦手だった。他人の為に生きたいと願う姉が僕には羨ましかった。

必要とされるまでどこまでも努力する姉の姿を弟として見てきたが、

やっぱり、どうしてそこまで頑張れるのか理解出来なかったし、

受け入れたくもなかったのだろう。知らなくてよい世界も

あるのかもしれない。こういう人種もいる。そう捉えて。

つまり、そんな姉の成績が落ち、奨学金がなくなっても

順位や通知表が上がっても下がっても姉は何も変わらない。

負の感情を向けられても相手を哀れむだけだということが言いたい。

しかし、高所恐怖症の姉がこの屋上に足を踏み入れたのは事実だろう。

問題点は、勉強に集中できなかった理由。姉に”何か”があったということ。

ガチャリ。

鍵を回転させ、唾を飲み込み、ドアを開けた。

ギィィイ。

僕の手は足は体は震えて騒ぎ出す。恐怖ではない。

無上の喜びである。この屋上から落ちて姉は亡くなった。

1年前のこの日も、こんな風に少し肌寒かったのだろうか。

深夜の学校に忍び込むとき、どんな感情を抱いたのだろうか。

優等生らしく罪悪感か。それとも、考える余裕などはなかったか。

知りたかった。姉の全てを。最期に見た景色は何色だったのだろう

?

＊3

僕は1年前に姉が最期に見た景色を見ているんだ。
この場所で、この時間に、この景色を見たかったが為に
入試で最高点を狙い、入学式で新入生代表挨拶を引き受け、
委員会は学級委員に自ら立候補し、期末テストは首席キープ。
生徒会の推薦は勉学に集中したいのでと失礼のないよう断った。
通知表も何処の誰に見せても恥じぬ数字を並べ、優等生のフリを。
姉のように凛と正しく真面目な期待される優等生を演じてみせた。
姉の生き写しのように生きる僕を気持ち悪いと狂ってると母は
侮蔑の眼差しを向けた。本当のお兄ちゃんはどこ？と妹は
涙を浮かべていた。父はそのまま頑張れと褒めてくれた。
高校生活を送る上で必要なものは何だろう？姉なら
「うーん。大切なモノを間違えない心…かな」と
答えてくれるだろう。目を瞑れば聞こえてくる。
天国から僕に呼びかけてくれるソプラノ声が。

目を瞑れば脳裏に見えてくる。幸せそうな
笑みを浮かべて高らかに笑い転げる姉が。
姉は永遠に僕の心で生き続けるだろう。
「どこに存在意義を求める必要があるの？」
不満そうに悲しそうに姉は質問を質問で返した。
人間は生きる意味を理由を根源を探し求める生物である。
存在意義を求めることは本能に従って生きることだと僕は思う。
だから、来た。僕の存在意義を掴む為に。姉に起きた真実を探す為に。

ガタッ

僕はフェンスに上る。屋上を囲うフェンスを軽々と飛び越えた。
「人間より綺麗なものはあるのかな」雲がない澄んだ夜空を見上げ、深呼吸する前に疑問を溢す。姉は人間より素晴らしいものは存在しないと
言っていた。姉が人間の神秘を楽しそうに語る姿が鮮明に思い浮か

べられる。

「人間ほど汚いものは存在しないわ」

あどけない少女の声が背後から聞こえた。ガシャン。背中にぬくい重みが与えられる。

誰だろう。聞き覚えのない声。当然、ソレゾレ逆方向を見ているので顔が見えない。

＊4

「ごちゃごちゃとくだらないことで悩んで苦しんで溜め込んでも本能に従って生きる。

後先短くなっても社会貢献し終えても必要とされなくとも毎日寝ては起きては

理屈ばかり並べて権利を主張する人間のどこが綺麗だと言えるの？」

うんざりとした口調で少女は問うた。姉なら、どう答えるだろう。

「それでも。そんなとこも全部ひっくるめて素晴らしいんだ」

『あなたも心を持てば世界が愛おしく思えてくるわ』だろうか。

「下等生物を見下して、社会問題だと騒ぐ人間が素晴らしいの？」

括りが大きいな。「人間は遺伝と環境で変化し、成長し、進化しているから

多種多様な人格が生まれる。長所は、良く言えば個性で、悪く言えば欠点になる」

はあ。どうして僕は顔も見えぬ少女に語っているのだろう。「だから、人間を」

一括りにするな。屋上を囲うフェンスを挟んで、背中を預け合う僕と少女。

ふっ。と少女が笑った気がした。「あんたは夢を持って生きれる？」

「アタシはね、子供の頃から叶えたくても叶えられない夢を持ってるの」

夢。そういえば、優秀な姉の夢を叶えるのは、ひねくれ者の兄のはずだった。

「キミは人間に産まれてきたことを後悔してるのかい？」「そうかもしれないわね。

自分を優先する自分が嫌いだもの。相手を優先する偽善者も。見え透いた汚い心も」

三日月になりたい。アタシは無機物になりたいの。命は尽きる運命を持ち併せてるから。

「ははっソレは興味深いな。キミは月の裏側は欠けているとでも言いたいのかい？」

「アタシは自分で見たもの以外は信じないって決めてるの」「衛星写真を見給え」

「ご、合成かもしれないでしょ！」んなワケあるか。現実主義者でもなくなる。

理屈を並べているのはキミじゃないか。「ふん。あんたはどうなのよ？」

「肉眼では確認できない星になりたかったと思ったことはあるよ」
姉の主義に従い、ふざけた質問には真面目にふざけて答えた。
声からするに幼い印象を受けるが、この女の子は誰だろう。
深夜だぞ。学校だぞ。屋上だぞ。何故ココにいるんだ？
誰か来るなど予測しておらず、鍵は閉めてなかったが
女子生徒が自殺したと噂された立入禁止の屋上に
入ろうとする人がいたとは。一体どんな神経を
しているのだろうか。という疑問は自分に
そのまま跳ね返ってきてしまうので
投げかけなかった。投げかけれなかった。
驚いた様子で「あんた兄弟とかいたりする？」
おそるおそるというか期待するように訊ねられる。
「いたよ」過去形。「綺麗事を並べる優秀な姉がね」
その姉も僕が現在立っているこの場所から落ちて死んだ。
その上の兄に僕は会ったことがない。「車に轢かれちゃった」

１３年前。病弱で通院してた7歳の兄が信号無視をしたらしい。
転んで避け切れなかっただとか。当時の姉は６歳で。自業自得だ
と兄の写真を破いた。それは僕の知ってる姉らしくない行動だった。
少女は勝手にがっかりし、どうでもよさそうに「ふーん。間抜けな
人ね」
と勘違いした。もし、その優秀な姉はココから転落死したんだと言
っていたら
僕らは会わなかったことにしただろうか。「アタシにもいたわよ。
お兄ちゃんが」
ガシャン。屋上を囲うフェンスを上る。背中越しに聞こえていた声
はだんだん近づく。
「弱虫で泣き虫で頼りなかったわ」過去形だった。３０ｃｍ程度し
かない足場に腰掛け、
空を切るように足をぶらぶらさせる。落ちれば姉のように無事では
済まないだろう。
恐くないのか。「キミは家族と他人との境目はどこにあると思う？」
「何よソレ」
僕もフェンスを背もたれにして少女の隣に腰掛ける。少女はジャー
ジだった。

見覚えがある。この学校の指定ジャージだろう。「…否、なんでもない」

しかし、月と星の明かりは暗くてよく見えないが、それはボロボロで名前が消されていた。ラインは青色。1年生。僕と同学年だった。

＊5

「今夜も三日月が素敵ね」うっとりした視線で少女は夜空を見渡した。

ココが何処だか理解しているのだろうか。真夜中の学校の屋上のフェンスの外側だぞ。姉が見た最後の景色を知りたくて僕は臆することなく飛び越えたが、この少女も迷うことなく足をグラウンドがある外側に放り投げて居座った。

この子が誰であろうとどうでもいいけど「今夜も？」

だんだん興味が湧いてきた。姉が転落死したこの屋上はすぐに生徒立入禁止で封鎖されたが、幽霊やらオカルトやら噂に振り回された生徒が好奇心に胸膨らませて騒がれていたらしい。階段付近で叫んで上っては下りを繰り返し、寒気がしただとか見えただとか。

肝試しや度胸試しスポットにされていたとか。でも、そんな噂も落ち着いた頃に

屋上へ繋がる階段から転落し、入院した先輩がいた。誰かに突き落とされたと

自白していたが、ソレは体を張った嘘だと見抜かれ、誰も相手にしなかった。

そんな阿呆で惨めな先輩が退院したかどうかはどうでもよいので語らない。

3年生が卒業して僕らが入学してからは飽きたのかパタリと噂も静まって

屋上に近づく物好きもいなくなったと聞いていた。僕は今日が来るまで

状況と条件が揃う機会が来るまで努力し、思いを馳せ、待っていた。

姉が最期に見た景色を見たくて。もちろん、誰にも告げていない。

疑問を口にする。「キミは昨日もココに来たのかい？」「そうよ」

三日月を見つめたまま答えられた。「鍵が閉まっていただろ」「そうね」

まさか。「合鍵を作ったのか？」「ハズレ」生徒が亡くなり、噂が広まった後は

学校側が管理を怠った所為も否めないとのことで鍵の保管場所は厳重になった。

僕がこの鍵を手に入れるのだって半年以上も時間がかかってしまったんだ。

そう簡単に盗み出すことも、合鍵を作ることも、出来るワケがなかった。

そもそも姉が死んでからこの1年で鍵は3度も変わったのだし。

「決められた道は嫌いなの」意味ありげに微笑む少女は

手を合わせる。「三日月になれますように」と願いを込めて。

＊6

姉は父方の苗字を名乗っていたので、僕は母方の苗字で学校生活を送っている。

怪談話や幽霊話に花を咲かせず、話を合わせるように姉の情報を集める為に。真実を

知る為に。屋上の鍵を手に入れる為に。信頼を芽生えさせるのに時間はかかったが

庶務とはいえ、生徒会に属する人がクラスにいたのは幸運だった。その友人Ａに

転落死した弟だから屋上の鍵を貸してくれと言ったわけではない。飽くまで

自分の身分と目的を隠して器物損害に当たってしまうことを事故に見せかけた上で計画的にだ。正式に借りたワケではないので

帰りに職員室に忍び込んで返しに行く手間はあるが。

それでも、成功したんだ。こうして、僕は屋上にいる。

だから、見知らぬ少女が屋上に入り、フェンスを飛び越え、

当然のように僕に話しかけてきたことが不自然でおかしかった。

少女は僕が屋上に来るのを知っていたはずがない。屋上のドアが開くと

知れるワケがない。実際には、少女は昨日も一昨日も気まぐれに訪れていて

ドアから侵入したのではなかったが。ソレを僕が知るのはもう少し先の話でして。

深夜の学校に忍び込む人がいると僕が思わないように少女も誰かがいると思わない

はずだ。しかし、少女は動揺しなかった。それどころか、僕を動揺させる言葉を投げた。

＊7

「遅ぇぞ、梅垣」臆することなく椅子に腰掛け
だらしなくネクタイを緩めて制服を着こなす友人A。
「他のヤツらバラバラでよぉ…知らねぇのばっかいるぜ」
飛永の後ろ座席に荷物を下ろす。「諸戸さんは文系だっけ」
四月。学年トップだった僕は、2年前の姉と同じく理系クラスを
希望し、親しい友人はおらず、留年とも縁の欠片もなくクラス替え。
生徒会庶務の飛永は、携帯を弄って「茄那は5組の鳩先クラスだとよ」
バスケ部の彼女を心配する。「…それはお気の毒に。人を巻き込むなよ」
諸戸さんは昨年のクラスメイトで派手な外見や騒がしい性格で誤解されやすく、
一部の女子から嫌われていたようでちょっとした揉め事があった。
陰湿なイジメを
していた女子に「ダサッ」と正面向かって言ったとか。悪事や感情を包み隠せないようで

彼女は良き事も悪き事も他人事でもストレートに発言してしまう。詳しく何があったかまでは

知らないが、敵を作りやすいのだろう。飛永はその裏表のない性格に惚れただとか言ってたが。

「オイオイ。相手は生活指導の鳩潟だぜ？もうとっくに目付けられてるだろーよ」お手上げだ

と両手を挙げたポーズをする。ピロリロリン。手に持っていた飛永の携帯が鳴り出した。

噂をすれば。彼女からのメールだったらしい。「ワリィ。ちょっくら、行って来るわ」

「始業チャイム鳴るぞ」僕は無意味な忠告をし、改めて新たな教室を見渡す。

学年が上がったからといって規模も構造も変わらない。緊張してるのか

知り合いがいないのか割合大人しく一人で過ごしてる人が多い。

「あの。すみま。せん」ぎゅっと鞄を掴む手が震えていた。

茶髪を三つ編みにした女の子。太ぶちメガネがずれる。

「座席。どこ。か分かり。ますか」不自然な途切れ方で

俯きながら訊ねたのは昨年もクラスメイトだった荻原さん。

先生の指示はなかったよと伝えるとキョロキョロと目を泳がせ

「失礼し。ます」空いていた席。僕の隣に決めたようだ。「あの。」

荻原さんは座ろうと椅子に手をかけるが「迷惑で。したか」上目遣いで

不安そうに聞く。う。可愛い。おどおどとした態度が小動物みたいで可愛い。

スカート丈は膝下だし、メガネは古そうだし、オシャレに興味なさそうだけれど

三つ編みほどいたら雰囲気変わると思うんだよなあ。一つ一つの仕種が危なっか

しくて目が離せないのに、一緒に居るとつい空気に包まれて穏やかに和んでしまう。

＊8

そんなことない。僕は首を左右に振って否定する。そんなに周りを窺はなくとも

誰も荻原さんを嫌いにならないのになあ。「嬉しいよ。とっても」

飛永しか

友人はいないと思ってたし。かあっと頬を染めて「ぐ。け。が。えと」

ガシャン。荻原さんは筆箱を落とした。『モリ熊』の筆箱を拾う。

「すみま。せん」謝らないで、と渡して「好きなのかい？」

ガッシャン。訊ねると慌てたように「すみみ。ません」

再び落とした筆箱を拾った。「可愛いよね。ソレ」

リンゴを丸かじりする熊。「妹も好きだから見たことある」

「どのシ。リーズ。ですか」「たしか、メロンｖｅｒ…だったかな」

壊れた。「わわわわわ」荻原さんが壊れた。目を輝かせて

「スゴ。イです」「羨ま。しいで。す」と弾んで話し出す。

モリ熊はフルーツ盛りだくさんと森を掛けてると教えてくれた。

1年間。同じ学級委員で話す機会は何度も合って初対面のときよりも打ち解けてくれたなあ。こうやって言葉をつっかかえながらも頑張って話す

荻原さんは可愛い。応援したくなる。『モリ熊』は、リンゴやメロンだけではなく

色んなフルーツが売っているらしい。妹のミカの誕生日も来月に迫ってきたし、

プレゼントに良いかもしれない。「荻原さん」「はい」小物とか大好きだし。

「僕と付き合ってくれないかな」

小さな口をパクパクと開けて「は。う。む。ぐあ」よく分からない声を

出された。「妹にモリ熊を買ってあげたいんだ」と説明すると

「あ。そゆこ。とです。か」と項垂れ落ち着きを取り戻す。

＊9

「かしこま。りました」荻原さんはずれた分厚い太ぶちメガネをかけなおす。

しどろもどろになりながら「不束者で。すが」とお辞儀された。天然１００％だ。

でも。そんなとこが「可愛いんだよなあ」と言葉を漏らすと教室のドアが傷ついた。

「鳶（とんび）将軍。眼球が腐りました。助けてください」「では、早速治療しましょう。オペの準備を」

キーンコーン。カーンコーン。チャイムは繰り返す。「分かりずらくイチャツかないでくれ」

諸戸さんと飛永は２人で同じ椅子に座る。「５組に戻らなくて大丈夫？」出席点呼の時間だけど。

「担任なら来ねぇぜ」諸戸さんに聞いたのに飛永が答えた。「そんなことより、手術を。第一患者を

優先してください」カチカチと携帯を弄りながら飛永に寄りかかってるのは、彼女の諸戸さん。

訳。私の話を聞いてください。「職員室に行ったんだけどよぉ」飛

永も携帯を弄りだし、話し出す。

「深刻な顔で、始業式を中止するわけにはいかない。でも、保護者が。評判が。って騒いでたぜ」

荻原さんは首を傾げた。そこで、やっと気付いたらしい。「なんだ、いたのか。相変わらずだな」

「ごめ。んなさい」ペコリと荻原さんは謝る。だから、そういうのがよぉ…と忠告し始める飛永を

僕は遮る。「なんで職員室に行ったんだい？」「まぁ…その、」歯切れ悪く答えるので「抗議しに」

諸戸さんが答えた。「私がどうして鳶と離れなくてはいけないのかご説明を願おうと思いまして」

分かるだろ？と飛永はジェスチャーする。暴走して生活指導の鳩潟先生と揉める前に止めよ

うとしたのだろう。「授業を受ける眠たそうな表情が今後一切見られなくなってしまうなど

私にはとてもとても耐えられません」「んなの見てんじゃねぇよ！」だから、イチャつくな。

案外。２人はお似合いだと思っている。美男美女。生徒会の飛永鳶とバスケ部期待の諸戸茄那。

「離れて募る恋心とも言うし、会えない時間が増えるほど、飛永が

優しくなるかもよ」「否定します」

飛永と同じクラスになりたかったなら、理系クラスを選べばよかったのに。嘘でも吐かれたのか。

「梅垣。適当なこと吹き込んでんじゃねぇよ」まあ、僕が巻き込まれなければどうでもいいけど。

問題を起こされては困る。飛永は目立つ存在だから。生徒会というのもあるが、容姿が。

生徒会長を目指すには相応しくない頭髪だと思うけど、それは古くさい考えか。

否、問題はそこではなく。つまり。一緒にいる僕までもが目立っては困るということ。

悪い意味で。『転落死について調べまわっている男子生徒がいる』と噂になっては動きにくい。

「鳶は、私の鳶は誰よりも優しい心を持っていますから。これ以上優しい人間にはなれません」

優しい心。僕は、姉に出会うまでそんなものを信じていなかった。人間は優しいフリは

出来るが、優しくなれない。他人の為には優しくなれない生物だと思っていたから。

＊10

「席に着きなさい」

担任と思われる男性が咳き込んだ。教室は静まる。

ゾロゾロと適当に席に着く生徒に紛れて諸戸さんは帰った。

自宅ではなく自分の教室に帰ってることを願おう。飛永は僕と荻原さんに

彼女がいたことを黙ってもらうよう人差し指を口に添える。コクリ。頷いておく。

「挨拶は後回しにする。全員いるな？…突然だが、今日の始業式は中止だ。荷物を纏めろ」

ピーポーピーポー。パトカーのサイレンが繰り返される。学校に近づいてるのか音が大きくなる。

警告。窓の外を見て立ち上がる生徒が1人。3人。ゴホッ。わざとらしく咳き込み「席に着きなさい」

渋い声で怒鳴る担任。初日は嘗められないようにと威張ってるのとは違う。そんなものを見るなと

目を瞑る。外に何があるというんだ？「先生」と窓際に座ってた黒髪の女子生徒が手をあげる。

「…どうして救急車を呼んであげないんですか」

結局。何があったのか詳しく全校生徒に説明されないまま始業式は中止になった。

ピンポンパンポンと校内放送が流れる。落ち着いて生徒は速やかに帰りなさい。

先生方は事情聴取がありますので、時間がある方からお集まりください。

＊11

飛永は生徒会長である兄貴なら何か知っているのではないかと電話をかけるが

「繋がらねぇ」電源を切られているようだった。「あんのクソ真面目野朗がっ」

会長は機械音痴ではないが、一日中、携帯を見ないのは普通らしい。煩わしいから、とサイレントモードに設定されているだとか。

「お兄様は既にご帰宅されているのでは。私たちも、帰りましょう」

「お前は俺ん家に来たいだけだろ」諸戸さんの無表情は無表情になった。

僕らは廊下側の席だったので窓の外に何があったか見ていないし分からない。

始業式が中止。只事ではないのは説明されずとも、全校生徒に伝わっただろう。

校門裏に止まったパトカーは赤く赤く光っていた。姉が転落死したときはもっと

たくさんの警察が学校に乗り込んでいたのだろうか。ガチャン。自転車の鍵

を外し、押す。「僕も駅まで歩こうかな」何があったか分からないから

不安だというのもある。「すみま。せん」荻原さんはまた謝った。

何か分かったら教えてくれ、と飛永と諸戸さんに別れを告げてゆったりと歩く。

飛永に抱きついて自転車の後部座席に乗る諸戸さんは「落ちそうです」と笑っていた。

笑顔。諸戸茄那は笑うことができる。飛永の前だけ。私立中学に通っていた僕は、2人に

何があったのか知らない。ガキのときから無愛想なヤツだったぜ、と飛永は話していたけど

違和感を覚える。無愛想？たしかに、彼女はあまり感情が表情に出ないようだが、違うだろう。

飛永の前では笑っているではないか。教師の前でも女子の前でも諸戸さんは無表情なのに。

他人には見せない笑顔の正体に、飛永は気付いているのだろうか。知っているのだろうか。

「委員会は決めているかい？」「悩み中で。す」僕は自転車を押し

て歩幅を合わせる。

昨年。僕は自ら立候補したが、荻原さんは女子に押し付けられたように見えた。

「梅垣く。んは今。年も学級委。員です。か」「委員長を狙ってるんだ」

2年前に転落死した姉と同じように。「大学推。薦の為です。か」

「ううん。一般受験希望だよ」「え」どうして？と不思議

そうに首を傾げる。このまま、成績を落とさなければ

学年トップである僕は第一希望の大学へ受験勉強せずとも

重苦しい努力することなくとも面接や小論文程度で入れるだろう。

＊12

それでは意味がない。「時間はメールで」僕がこの学校に来た意味がなくなるんだ。

今度の日曜日に、妹の誕生日プレゼントを買うのに付き合ってもらう約束をして

ペダルを漕ぐ。ケータイで時刻を確認した。まだ9時が過ぎたばかりだ。

どうしようか。真っ直ぐ家に帰ってもいいのだけど、時間がある。

クルリと方向転換し、町の図書館へ向かう。姉もよくココに来ていた。

家で勉強すると家族が気を遣ってしまうから、と。受験勉強の為とはいえ

落ち着ける場所が欲しかったのだろう。「か行…さ行…っと」誰かとぶつかった。

「金魚鉢とは金魚の鑑賞を目的とした鉢ですが、矛盾してませんか」

黒髪の女子生徒。先生に質問したあのクラスメイトである。

僕に話しかけているのか？「水草や砂利が入っていても、それは」
金魚鉢と呼べるのでしょうか。金魚の飼育方法について述べられている本を
数冊抱えて彼女は訊ねた。「定義の捉え方が違っても、金魚鉢は金魚鉢じゃないかな」
人間が人間であるように。その人はその人で、他の誰にも代替が利かないことと同じように。
「答えが見つからないのは、正解が存在しないのではなく全て正解だからかもしれませんね」
ふふっと満足気に微笑んで「金魚鉢はご協力に深く感謝いたします」背を向けて歩き出し
本棚の曲がり角で彼女は立ち止まった。上下左右に首を動かし、躊躇って、確認して、
彼女は振り返り、瞳を揺らした。「ご縁がありましたら、また訊ねてもよろしいでしょうか」
それは「構わないけど」縁がなくとも事故がなければ月曜日に教室で会うだろう。
彼女の席は窓際で僕は廊下側。クラスメイトだったと知らなかったようだ。

始業式も自己紹介も中止されて、顔を合わせることもなかったから。
僕だって彼女が先生に質問しなければ覚えてなかっただろう。
――――どうして救急車をよんであげないんですか
１１９番。あの窓から見える位置に怪我人がいたのか。
始業式を中止するほどの怪我を負った人間がいたというのか？
救急車を呼ばずに警察だけを呼んだ理由。それは。思考を停止する。
考え過ぎだろう。姉が死んだからネガティブになっているのかもしれない。
まさか。死人に救急車を呼ぶ必要がないから警察を呼んだわけがないと願った。

＊13

クラスメイトと言っても、彼女を見たのは今日が初めてだったので名前が分からない。彼女も僕の名前を知ってるわけがない。

数分同じ教室にいたとはいえ、顔も見たことがなかったのだから。

ならば。どうして僕に話しかけたんだ？ぶつかったからとは考えにくい。

疑問が浮かんだときに、タイミングよく話しかけやすそうな人間がいたから？

制服を着ているから同じ学校だと分かるし、ネクタイの色で同学年だとも分かるし。

高校生という視覚情報が彼女の気を許したということだろうか。…否、どうでもいいか。

うん。どうでもいいや。他人を気にしても仕方がない。それでも僕も世界も何も変わらない。

無音。サイレントモード。僕はメールが来ていたことに気付いたのはそれから1時間後だった。

『帰っちまったか？』『疑うわけじゃねぇんだけどよ』『このメールに気付いたら俺に電話してくれ』

なんだコレ。飛永からのメールは曖昧で要領を得ておらず、何が言いたいのか分からなかった。

始業式が中止になったのと関係していることだろうか。図書館で携帯はマナー違反なので

手にとった本を借りる手続きをすませ、外の自転車置き場に移動して電話をかける。

イチ、ニ、サン。コール音がブツリと切れて弱々しい飛永の声が聞こえた。

「…梅垣だよな？」「他に誰がいるんだよ」

だよな。ワリィワリィといつもの明るい調子にもどる。

「今どこにいるよ？」「図書館」

学校から近ぇじゃん。と飛永は笑った。「オイ、やめろって」

「男らしくない鳶将軍は嫌いです。気持ち悪いです。でも、好きです」

雑音が入る。飛永と諸戸さんが携帯を取り合ってるらしい。状況が読めない。

「あぁーつまりだな…これから学校に来てくれね？話さなきゃならねぇことがある」

玄関で待ってると言い残して、電話を切られた。自転車で飛ばして１０分ってとこかな。

風が気持ちよい。鳶と諸戸さん一緒に帰ったと思っていたが、学校に引き返したのか。

細い道路の近道を通って、人を物を犬を避ける。自転車で歩道橋は渡れないな。

駅まで送ったけど、荻原さんはちゃんと家に帰っただろうか。２日後の約束。

日曜日、買い物に付き合ってもらう約束をしたけど、迷惑だったかなあ。

妹であるミカの誕生日プレゼントを選ぶ店を紹介してもらったら喫茶店とかで何か奢ろう。うん。委員会で色々と迷惑かけちゃったしな。

にしても。ここの信号やっぱ遅いな。普段は歩道橋を渡るから気にしないけど。

チラリ。じーっと見られてる。知らない人に。スーパーの袋を持ったおばちゃんに。

信号は赤。渡れない。動けない。「…あの」僕に何か？と聞こうとしたが、遮られた。

「あらまぁ！立派になったわねぇ」えっと。「覚えてないかしらぁーお隣だった遠藤よ」

「あんた梅ちゃんの子でしょう？もう高校生になったのねぇ」「母を知っているのですか」

「やぁねぇ。あたしは石竹くんも梅ちゃんとも同級生だったのよ」親父も？「そうでしたか」

やばい。全然記憶にないや。誰だ、この人。親父も母さんも僕も知っているということは――

「あのね。こんなところで言うのも、なんだけれどもね…藍花ちゃん、残念だったわねぇ」

姉のことも知らないワケがない。お母さんとお父さんによろしく伝えておいてと

挨拶し、「コレつまらないものだけど」とスーパーの袋をがさごそと荒らし

かりんとうを渡された。「若い人はこういうの嫌いかしら」「いいえ」

嬉しいですと社交辞令を述べると信号が青に切り替わる。一礼して

遠藤さんというお隣さんだった人と別れた。全く思い出せなかった

けど。

＊14

「屋上のドアを抉じ開けようとした人物を見たと証言していたな。詳しく話してくれ」

飛永鳶の兄貴である我が学校の生徒会長に椅子へかけるよう指示される。

「…失礼します」横目で飛永を睨みつつ高そうなソファに座った。

聞いていないぞ。どうして僕が会長と話をしなければならないんだ？

「俺ら教室で待ってるからよ」逃げた。飛永と諸戸さんは逃げていった。

それに。その話は昨年に僕が屋上の鍵を手に入れる為に吐いた”嘘”である。

「どうして今頃になって。始業式が中止になったことと何か関連があるのですか」

バレるワケにいかない。姉みたいな優等生を演じてきた今までの努力が崩れてしまう。

「一般生徒には教えられん」はあ？「不公平ですね。情報開示を求める権利もないのですか」

では。これにて失礼しますと立ち上がるとまあ当然だが引き止められた。生徒会長に。

「座れ」

威圧感。従わなければいけないという命令。渋々と、失礼な態度で僕は不躾に腰掛けた。

「以前に全て報告しました。書類に記録されているはずです」「もう一度確認したい」

バレてるのか？勘付かれたのか？確証を得る為に弟を使って呼び出したのか？

前代の生徒会長が卒業したから。だとすれば、昨年から怪しまれていた

ことになる。飛永先輩が副会長だった時点で気付いていたとでも？

矛盾が生じないよう気を引き締めて、無駄だとしても訊ねさせてもらう。

「裏門にパトカーが止まっていましたが、何故救急車を呼ばなかったのですか」

「…！それは生徒会の判断ではない。校長にでも訴えろ」「理由を知りたいんです」

無言。「答えられん」苛々する。「学校の評判を落とさない為ですか。保身の為ですか？」

「違う。本人の意思だった」「救急車を呼ばないでくれって病人が申し出たと？」「…そうだ」

んなワケあるか。痛みに苦しむ人間が学校のことを考えていただと？腹が立つ。ムカツク。

「そうやって石竹藍花が転落死したときも救急車を呼ばずに見殺しにしたのですか！」

会長は眉を顰める。「藍花先輩？」やってしまった。自分から墓穴を掘ってしまった。

「どうしてお前が知っているんだ」「…ニュースで見て」ギロリ。嘘を吐くなと目が睨んだ。

新聞やテレビで取り上げられた情報で他人がこんなに感情的になるワケがない。…逃げよう。

居た堪れなくなった僕が駆け出すタイミングと会長が飲んでいた紅茶をぶちまけるタイミングは

どちらが速かっただろうか。バシャリ。クリーニングしたばかりの制服に染みがついた。

うわ。僕が動揺するのは計算で。「すまん」悪びることなく会長は口だけ謝って

ドアにもたれかかる。「質問に答えろ」「謝る誠意があるなら、どけて頂きたいですね」

＊15

生徒会室の簡素なキッチンと布巾を借りて紅茶の染みを落とさせてもらう。

「お前は死体を見たことがあるか」「…葬式でなら」姉の死体を。

そうか。と頷いて黙る。「俺は見たことがない。血痕は

残っていたが、近づけなかったんだ。藍花先輩が

亡くなったという事実を認めたくなくて」

姉が僕の2つ上だったから、会長の1つ上だったのか。

「見ていない俺が言うのもなんだが、発見された時点で手遅れ

だったと聞いた。草花が衝撃を緩和したお陰で傷は少なかったらしい」

知ってる。覚えてる。真っ白すぎる肌を。強張った表情を。冷たかった手を。

「だから、救急車を呼んでも」「助からないと決め付けたのは医学の素人でしょう！」

分かってる。こんなの言い訳だって。「…大声出してすみません」

でも。姉のことになると

頭に血が上る。「素敵な人だったな」この話は終わりだと再びソファに会長は座った。

会長は僕と石竹藍花の関係について聞かなかった。知っていると思えないが。

「まぁ、本人の意思で救急車を呼ばなかったという理由は表向きだ」布巾でテーブルを拭く。「どこで伊佐木先生のことを聞いたかは知らんが…」

伊佐木先生？「黙っておいてくれ。今年の生徒数も減っているんだ」「評判ですか」

「誰がそれを？」「考えれば分かるだろ」校長の方針か。「話を戻すが…教えてくれんか」

「今更、屋上の鍵を壊そうとした人を探してどうするんです？」「警察に突き出す」

「そんな」どうしよう。鍵穴を傷つけた罪って器物損害か？「だから、頼む」

二度とあんな悪戯をさせないよう懲らしめたいんだと会長は頭を下げた。

「重く受け取り過ぎでは。犯人は幽霊話に興味があっただけかもしれませんよ」「人のトラウマで遊ぶ愉快犯を許せるか！」

愉快犯？「でも、鍵を開けるのは失敗したんですし」

「やけに犯人を庇うんだな。矢張り見たのか？」

見たも何も僕がやりました。一人演技していました。

なんて言えない。鍵穴を傷つけただけで、警察だなんて。

もしかして。屋上の鍵も無断で拝借したから窃盗罪も問われるのか？

＊16

指紋を拭きとって職員室の金庫に戻したが。勿論、合鍵も作ってない。

証拠は残ってないはず。「正直に言ってくれ。生徒会は全力でお前を守る」

「そんなこと言われましても困りますよ」会長はがっくりと肩を落として紅茶の

ティーカップを片付ける。「こんなのしかないが」動物型クッキーを出してきた。

もぐもぐ。懐かしい味だ。僕は帰ってもよいだろうか。あ。「かりんとう食べます？」

「渋いもん持ち歩いているな」「スーパーの袋を持ったおばちゃんに貰いました」

正直に答えたのに怪訝そうな顔をされた。「…不味くない」「甘いですね」

ボリボリ。ボリボリ。生徒会長とかりんとう。以外と似合うかも。

「飛永もかりんとう食べますかね」「んあ？」会長の苗字も飛永だった。

「アイツ甘いもん嫌いじゃねえのか？」「そうでしたっけ」「知らないけどよ」

飛永が会長をクソ真面目野郎とか呼んでいたし。あまり兄弟って仲良くないのかな。

「なぁ、兄貴。梅垣は真面目なヤツだろ？」「鳶将軍の目玉と内臓が強力接着剤で固まりました」

訳。美味しそうなクッキーとかりんとうですね。図々しく飛永は「もうちっと右に行けよ」

手でしっしっと自分の場所を確保する。狭いなら会長の隣に座ればいいのに。

諸戸さんは飛永の膝の上に座ってかりんろうに手を出した。「素敵です」

と飛永の口に詰め込んでいく。「はへろっへ」訳。やめろって。

めんどくさい2人だな。「教室で待ってるんじゃな…」

かったのかい？と聞こうとすれば。「そのつもりだったけどよぉ」

「ナイル川はエチオピア高原が隆起してきた白亜紀以降に形成されたと考えられています」

訳。待ちきれませんでした。生徒会室の壁時計を見る。確かに。動

物型クッキーと

かりんとうを食べていたから気にしていなかったけど、もうお昼になる時間だ。

もともと今日は午前中に帰れる予定だったのでお弁当も用意していない。

「話は終わったんだろ？どっか飯でも食いに行こーぜ」飛永は

提案するが、会長はまだ仕事が残ってるからと断った。

些細なことでも何か思い出せたら連絡をくれと

会長は頭を下げる。「お役に立てるか分かりませんよ」

数ヶ月前の話だし。僕の作り話だし。「それでもかまわん」

ここまで必至だとだんだん罪悪感が芽生えてくるなあ。後悔は

してないけど。どうして会長が今更捜しているのかも気になる所だ。

＊17

「飛永の生徒会副会長就任を祝って乾杯」カン。

「鳶将軍なら夕日を目指して走れば、明日は必ず見えます」

訳。生徒会会長の椅子まで後1年ですね。「まだ決まってねぇよ」

ファミレス。飛永はスパゲティで諸戸さんはオムライスを注文していた。

「お待たせしました」僕はトマトジュース。「オイ、梅垣。食いもんを頼めよ」

腹減ってない。会長と話してどっと疲れた気がする。疑われていなくて

よかった。ゴクリ。「紙パックの方が美味しいな」店員に言って

ストローを貰う。「「……」」飛永と諸戸さんは顔を合わせ

深刻そうな顔をした。「あのよぉ、疑ってるわけじゃねぇんだけど」

メールでもそんなことを言ってたな。「犯人は、お前じゃねぇんだよな？」

手が震えていたかもしれない。「…僕は目撃者だと言っただろ」急に心拍数が上昇

していたかもしれない。「だよな」変なこと言って悪かったよ。ホラ。俺が

奢ってやるから食えよ。とフライドポテトやらハンバーグやら迷惑なほどに注文していく。食べきれるのか、コレ。迂闊だった。

てっきり会長が僕を疑っているから呼ばれたと

思っていたが、まさか飛永だったとは。

でも。どこでそう思ったんだ？

「私はかりんとうを所望いたします」

「んなもんあるか」生徒会室に置いてきたなあ。

会長の昼飯になるのだろうか。「伊佐木先生無事だとよ」

「保健室の？」会長も何か言ってたな。「兄貴から聞いてねぇの？」

まさか。学校側の都合で救急車を呼べなかった人って「伊佐木先生だったのか」

生徒だと思っていた。「精神状態も安定したし、問題ないって兄貴からメール来たぜ」

精神状態？「怪我の状態は平気なのか」「すっ転んで左足を捻挫し

た程度だとよ」

え。「先生も左階段事件の被害者になったのかい？」「あぁー…違う、違う」

本当に何にも聞いてねぇんだなぁとがつがつと食べる。「説明してくれよ」

「悪質な犯人は未だ逃亡中です。なんらかの形で再び現れるでしょう」

伊佐木先生を精神的に苦しめた犯人ってことか？飛永は内容を話す。

「昨日の夜な。誰かが屋上に入って、血に見せかけた赤い塗料をぶちまけたんだよ」「そこって」姉が倒れていた場所だ。

だから、会長は数ヶ月前に侵入で失敗した犯人を

目撃した僕の話を聞きたがっていたのか。

「そこの花に水をやるのが」伊佐木先生だった。

2年前の転落死を思い出させられて意識を失ったと。

なんて不謹慎な野郎がいたもんだ。姉の死を馬鹿にしてるのか。

会長が必至に探していた犯人は僕ではなく、愉快犯の話だったんだ。

「でも、屋上からとは限らないのでは？」同一人物だと思われてい

たけど。

４階の窓からでも、喩え校舎からでなくとも、液体を溢すことはできるだろう。

＊18

「屋上に大量のトマトジュースの紙パックがあったんだよ」

ゴクリ。思わず、グラスに入ってる赤いトマトジュースを見つめた。

赤い塗料ってトマトジュースかよ。「成程。それで飛永は僕を疑ったのか」

「違ぇって。俺だって疑いたくなかったんだけどよぉ、茄那が…」

「私は、そういえば、梅垣さんって毎日トマトジュースを飲んでいますねと事実を述べただけでございます」

お前なぁ！と2人は食べ物を取り合いつつ言い争った。

「夫婦喧嘩はそのへんにしてくれ」僕の前でイチャつくな。

1年生のときは諸戸さんもクラスメイトだったから知っている。

僕が昼食に紙パックに入ったトマトジュースを飲んでいたことを。

隠してなかったし、姉がトマトジュースを好きだったわけでもない。

だとすれば。犯人も知っていたとすれば。この事件はどうなるだろう。

僕が毎日トマトジュースを飲んでいたことを知ってれば、上手くいけば罪を

擦り付けられると考えたのではないだろうか。人に恨みを買った覚えは

ないけど、理不尽に、首席だから学年トップだからと逆恨みをする人物もいる。

「これは、紙パックのトマトジュースに対する冒涜だ！と受け取るべきなのかな？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3622y/

三日月が見下す夜に

2011年11月23日14時52分発行